

## 重要文化財

### 禽獣葡萄鏡

この銅鏡は唐の時代（618-907）に中国で制作され、1331 年に後醍醐天皇（1288-1339）によって春日大社に寄進された。ここに見えているのは鏡の裏側である。表面は反射面を作るために高度に研磨されたであろう。

鏡の主な部分には、クジャク、鳳凰、疾走する馬、獅子、カワウソのような哺乳類など、さまざまな動物が描かれている。背景には、多産と繁栄を象徴する葡萄の木の間に蝶が浮かんでいる。中央には龍がおり、持ち手となる紐が取り付けられたであろう開口部がある。内側の仕切りリングには小さな円が連なり、外側のリングにはパルメットの模様が施されている。

銅鏡が政治的・宗教的に重要な役割を果たすようになったのは、制作が開始され、神聖なものとして扱われた弥生時代（紀元前 900 年頃～紀元後 300 年頃）以降のことである。ある銅鏡は、三種の神器のひとつとして皇室に伝わり、伊勢神宮にも祀られている。このような鏡は 600 年代から 700 年代にかけてよく見られたものであり、全国でほぼ同じようなデザインの鏡がいくつも出土している。しかし、この銅鏡は考古学上の遺物ではなく、何世紀にもわたっ

て大切に保管されてきたもので、状態も非常に良い。こうした理由から、この道鏡は重要文化財に指定されている。